

第4波は読書で乗り切ろう

イスラーム世界を知るためのお勧めの本：ホットな新刊書 2冊

林 幹雄 著『中東を動かす帰属意識 近くの隣人より、遠くの血縁』、ミルトス、2021年1月発行、2500円＋税

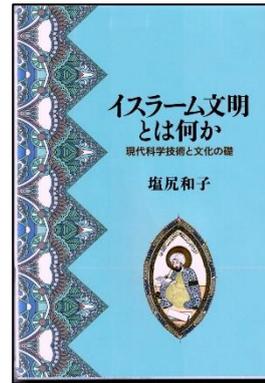
塩尻和子 著『イスラーム文明とは何か 現代科学技術と文化の礎』、明石書店、2021年3月発行、2500円＋税

板垣 雄三 記



(林さんの本)

21cm×15cm×1.8cm



(塩尻さんの本)

19cm×13cm×1.8cm

■林 幹雄『中東を動かす帰属意識 近くの隣人より、遠くの血縁』

〔著者の横顔〕

はやし・みきお（1956年～2021年）、富山市出身。大阪外国語大学アラビア語科卒業、カイロ・アメリカン大学 AUC 留学。商社マンとして大活躍され、住友商事株式会社のマスカット、バグダード、エルビル各事務所長、住友商事総合研究所国際調査チーム長を歴任された。株式会社オフィス・バドゥ代表、イエメン企業アドバン日本代表のかたわら、通訳案内士として交流事業を助け、一般社団法人日本オマーン協会理事、防衛省勉強会講師（2015～20年）。学術面では地域文化学会の理事を務めた。信州イスラーム世界勉強会では、有力会員として定例会の常連で、その活性化に貢献され、2018年4月28日松本市第3地区公民館大会議室における年度最初の行事で「クルド社会とマイノリティ」と題する講演をされた。大阪外大での学生時代、西アジア・北アフリカの諸言語（古くはシュメール語、アッカド語から、アラビア語、アラム語、ヘブライ語、コプト語、等々）に目配りが広く造詣が深かった伴康哉・福原信義という先生・先達の感化を受けたので、中東のコトバの多様性ことにマイノリティ（少数民族）の言語・文化・社会に鋭敏な注意を払い、温かな観察の眼を向け続けた。ライフワーク第一号にあたる本書の刊行を目前に、膵臓がんのため急逝されたのは、惜しんでも惜しみきれない。

〔本書の組み立て〕

発刊に寄せて（埼玉県知事・財中東調査会参与 大野元裕）

第1部 部族とイスラーム（14章からなる）

部族で構成された社会／部族社会を支える連帯と帰属意識／イスラームが興った頃の
アラビア半島／交易と巡礼の道／イスラームの興りとユダヤ教／部族の統治と刑罰／
イスラーム統治の広がりとしーア派／イスラームの信仰／イスラームの分派とイスラ
ーム社会の指導者／婚姻事情と家族法／離婚のルール／来世と聖者廟／モスクの基本
構造／イスラーム都市の歴史的景観

第2部 インド洋を渡った南アラビア人（5章からなる）

海洋交易で広がったイスラーム／環インド洋沿岸域に根付いたイスラーム社会／東ア
フリカに進出したオマーンとイバード派／イスラーム世界の奴隷／外国人労働者の境
遇とビジネス環境

第3部 宗教マイノリティと帰属意識（7章からなる）

ザイド派の部族社会／北イラクのクルド人／クルド人とヤズィーディー／クルディス
タンのヤルサン教団／イラクに根付いたキリスト教／クルディスタンのユダヤ人／湾
岸産油国の対イスラエル政策の変化

用語解説・引用文献

解説（筑波大学名誉教授・文博 塩尻和子）

あとがき（著者）〔発刊直前の著者他界の訃報を、塩尻教授が付記〕

表紙カバーの写真：著者の指定、著者は書物の完成イメージを抱懷されていたはず。

〔書評 読み方の勧め〕

1960年代・70年代以降の日本では、外務省や通産省（経産省の前身）など政府機関で、
中東・アフリカはじめイスラーム世界をよく知る官僚が、それまでの少数の重鎮的パイオ
ニアに代わる集団的陣型として形成されるようになるが、他方それに引けをとらぬどころ
か、ときには先回りすらする勢いで、いわゆる総合商社が、グローバル地域社会の深部に
通暁するエキスパート要員の活躍によってビジネスを支える政治・社会・文化情報を豊富
に集め、これを土台に独自の大局的戦略の見通しを立てたりすることが注目されるように
もなった。

本書の著者＝林さんは、日本社会にとって命綱というべきエネルギー供給源の中東は湾
岸社会の観察とそれへの働きかけをつうじ営々と形づくり確認してきた洞察に基づいて、
日本の読者のため、啓蒙的な入門書として本書をまとめた。いたる処、ご自身の見聞や体
験を織り込んで臨場感あふれた記述となっている。アラビア語やヘブライ語などの片仮名
表記に出会ったら声を出して読んでみて、意味や説明を本文中で探すこと。不慣れで意味
不明な言葉は巻末「用語解説」にあたってみたら、よい。

題名が示すとおり、本書は、中東理解の鍵である「帰属意識」という問題を軸に書かれ
ている。帰属意識とは自分が特定のグループ（集団）に属しているという意識で、「わたし

とは何者か？」という自己意識（アイデンティティ）や仲間意識（連帯感）と重なりあうものだ。26頁の「帰属構造と呼称」の図にあるような家族・部族・氏族・民族など〈族〉的結合の諸類型は、そうした帰属グループの例である。これが、いろいろなサイズで現れると、その最小単位は個人（未来の〈族〉の潜在形でもある）、最大単位は人類（アダムの子孫、アダム族）、となるから、国家・国民という選択肢はすこぶる仮想の軽いものとなる。これが把握できれば、分りにくかった中東社会の謎が一遍に解けてくるだろう。

第1部は、アラビア半島社会の部族構成の具体例を手がかりに、中東社会とイスラーム教とを一般的・基本的に解説する内容で、ことに第10章「婚姻事情と家族法」と第11章「離婚のルール」は認識を新たにすることで興味をそそるに違いない。87-88頁シーア諸派中の十二イマーム派の信者生活を飾るペルシア語のモフルの話や、133-134頁のイエメンの興味あふれる都市ジブラヤザビードの面影（評者の私もイエメンと聞けばすぐ挙げたくなる二つの街、ただし今や戦争でどんな惨状となっているか心配）なども、注目される。

第2部は、南アラビアの環インド洋地域との歴史的な深いつながり、すなわちイエメン東部からオマーン南西部にかけてのハドラマウト地方と東南アジアの関係、またオマーンと東アフリカわけてもザンジバルとの関係、の現在を規定する歴史的展望が与えられる。マレーシア・シンガポール・インドネシアのハドラマー住民やアラビア語語彙をタップリ含むスワヒリ語の拡がる東アフリカ海岸地域（サワーヒル）住民の話でもある。船乗りと商人が運んだイスラーム文明。千夜一夜物語・シンドバードと物流・情報交流。マニラの語源はアラビア語の「アッラーのご加護」（アマーヌッラー）という説など。ムスリム社会での「奴隷」の多彩な顔から現代中東での外国人労働者とビジネス環境まで、視野は拡がる。本書では触れられていないが、イスラーム登場前のメソポタミア文明とインダス文明とを結ぶディルムン文明（その中心はバハレーン島）も視野に入れることが必要だ。

第3部では、イラクとイエメンとにおいて、ムスリムではあるが非アラブ少数民族や、宗教の面で非イスラームの諸宗教・諸宗派に分類される少数民族集団が、並列的に採り上げられる。まず、シーア諸派の一つザイド派（イエメン北部のフーシー族集団）に始まり、イラクのクルド民族集団、北イラクでクルド語クルマンジー方言を話しシャイフ・アディ廟の聖地ラーリッシュに集住するヤズィーディー派集団、北イラクでカカイ社会を構成するヤルサン教団、イラクでシリア語のネストリウス派を受継ぐアッシリア東方教会やカルディア・カトリック教会など東方のキリスト教諸教会、イエメンやイラク・クルディスタンのユダヤ人[ユダヤ教徒]、にいたる諸集団だ。独自の言語・文化をもつ民族、独特の教義や神話をもつ少数派の宗教集団が多様性を保って持続してきたのが、中東なのである。この部の最後で、本書の締め括りとして、著者は2020年のアラブ湾岸産油国が対イスラエル政策を大きく転換したことを、中東の新たな風向きとして注目し、期待を寄せる。

以上、拾い出したトピックス群をザッと眺めるだけでも、本書が、人類文明発祥の地の目くるめく多様性の「都市型」社会（景色は沙漠や農村でも）／それを生きる人々の暮らしや思考法／について考えてみるための、情報の宝庫だという見当がつくだろう。この書物の読者には、たえず次の二つの問題を心に留めながら読み進まれるよう、お勧めしたい。

- ① 帰属意識は決して単一ではない。つまり、部族への所属は運命的に固定したものではない。族祖（アルブーヤブー）はスライドできる[父方の系図を上下して目印のご先祖さまは自由に取り換えられる]から一日の内に何回も部族交換が可能。その上、部族への帰属だけでなく、宗教や民族（言語・文化）への帰属も問題だから、中東の人々は社会の中で場面ごとに、それらを組み合わせた幾種類もの「自分」を選び分けながら暮らしている。複数の国籍をもち、複数の国のパスポートを持つのも不思議でない。
- ② 著者が期待したイスラエルと他の中東諸国との和解による「平和への道」の陰しさ。サウジアラビアのイスラエル接近やアラブ首長国連邦・バハレーンのイスラエル承認などを演出した米国のトランプ政権も退場した。事柄のむずかしさは、中東の人々の心の持ち方で解決するわけではない。多様な宗教・民族が共生する歴史をたどって来た中東は、世界を取り仕切る欧米によって20世紀に抗争の地に変えられた。英・仏が分断の中東諸国を線引きし、米国・ソ連（ロシア）が植民国イスラエル成立を推進。ユダヤ人いじめ・棄民の欧米の責任は重い。何がどう変われば、著者の希望は実現するだろうか。アラブ湾岸諸国・イラン・トルコ・エジプト・ヨルダン、そして何よりイスラエルの人々と欧米の市民たちが、郷土喪失のパレスチナ人の問題にどう取り組むだろうか。中東社会の崩壊を見ながらこの本を読む私たちが唸り声上げる問題だ。

■塩尻和子『イスラーム文明とは何か 現代科学技術と文化の礎』

〔著者の横顔〕

しおじり・かずこ（1944年岡山市生まれ）大阪外国語大学アラビア語科卒業、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学（宗教学）、ハーヴァード大学準研究員、日本大学文理学部非常勤講師、論文「アブドゥル・ジャッバールの倫理思想」で東京大学博士（文学）、筑波大学助教授を経て教授、同大学北アフリカ研究センター長、同大学理事・副学長（国際担当）、ついで東京国際大学特命教授、同大学国際交流研究所所長、現在は筑波大学名誉教授、アラブ調査室室長。

専門分野：イスラーム神学思想、比較宗教学、宗教間対話、中東地域研究。

主な著書・論文：編著『リビアを知るための60章 [第2版]』、明石書店、2020。／「イスラームフォビアに立ち向かう」（『日本のイスラームとクルアーン—現状と展望』、晃陽書房、2020。）／「公共宗教としてみたイスラームの世俗性と普遍性」（『ピューリタニズム研究第13号』、日本ピューリタニズム学会、2019。）／「イスラーム・ジェンダー論の行方」（『いま宗教に向き合う』第4巻、岩波書店、2018。）／「宗教間対話運動と日本のイスラーム理解」（『宗教と対話—多文化共生社会の中で』、教文館、2017。）／「ジハードとは何か—クルアーンの教義と過激派組織の論理」（『変革期イスラーム社会の宗教と紛争』、明石書店、2016。）／『イスラームを学ぶ』、NHK出版、2015。／「初期イスラーム思想における理性主義的人間観と宗教倫理」（『イスラーム哲学とキリスト教中世II実践哲学』、岩波書店、2012。）／『イスラームの人間観・世界観』、筑波大学出版会、2008。

／『イスラームを学ぼう』、秋山書店、2007.／池田美佐子と共著『イスラームの生活を知る事典』東京堂出版、2004.／『イスラームの倫理—アブドゥル・ジャッバール研究』、未来社、2001.／ほか多数。

訳書：カレン・アームストロング〔池田美佐子と共訳〕『聖戦の歴史—十字軍遠征から湾岸戦争まで』、柏書房、2001.／ジョン・L・エスポズイト〔杉山香織と共訳〕『グローバル・テロリズムとイスラーム—穢れた聖戦』、明石書店、2004.

〔本書の組み立て〕

はじめに

地図 イスラーム世界の広がり

目次

アラビア文字の転写表（文字名・アラビア文字・ローマ字・カナ表記）

序章 ギリシア文明とのつながり／都市の宗教

第1章 イスラームとは何か

イスラーム略史／アブラハムの宗教／今日のイスラーム—世界第2位の宗教勢力／在家の宗教—政教一致的な理想

第2章 ギリシア科学の受容

ギリシア語文献の移入／イスラーム支配の特徴—語られない2つの事実／イスラーム文明の特徴

第3章 ギリシア文明の継承と発展—大翻訳事業

ギリシア思想の導入／イスラーム科学（アラビア科学）／イスラーム科学の特徴／ハッラーンとのつながり

第4章 イスラームのイベリア半島征服とヨーロッパへの伝播

後ウマイヤ朝期（756–1031）／シリア方式の再興／コルドバとトレドの役割

第5章 商業活動の発展と航海技術

イスラームの商業活動／自由貿易地域の出現／航海技術の進展／鄭和（1371–1434？）の遠征／旅行家イブン・バトゥータ（1304–68/77？）／シチリアのイスラーム文化とフリードリヒ2世（1195–1250）／地理学者イドリースィー（1100？–65）

第6章 エレガンスと生活文化

『千夜一夜』／『千夜一夜』の世界とズィルヤープ（ジルヤープ）／エレガンスの基礎—ズィルヤープの貢献／料理とスパイス／砂糖とコーヒー

第7章 錬金術、数学、天文学

錬金術と化学（al-kīmiyā'）／数学（al-riyādiyah）／天文学

第8章 医学者と哲学者

医学（tibb）の発達／イスラーム哲学の展開／アヴェロエスからスコラ哲学へ／高名な哲学者

第9章 西洋中世哲学への影響

イスラームとの出会い／初めてのラテン語訳クルアーン—不正確な翻訳／ラテン・ア
ヴィセンナ主義とラテン・アヴェロエス主義／ラテン・アヴェロエス主義の禁止令

第10章 イスラーム芸術の世界—アラベスクと建築

イスラームと芸術／アラビア書道／アラベスク／幾何学文様

第11章 十字軍の歴史とレコンキスタ

聖戦はキリスト教の思想／十字軍／レコンキスタ

第12章 西洋の発展—脱イスラーム文明

十字軍の後遺症—歪められたイスラーム像／ギリシア・ローマへの帰還／イスラーム
文明からルネサンスへ／ルネサンスにおけるイスラーム文明の役割

第13章 イスラーム文明・近代文明の源流としての意義

イスラーム文明の影響を否定する人々／イスラームへの反感—ヨーロッパの一体感の
確立／イスラーム文明とは何だったのか

アラビア語から英語に入った単語（日本語・英語・アラビア語を対照する73例のリスト）

本書で参照・参考にした文献

索引

〔書評 読み方の勧め〕

本書は、イスラーム文明の現代的意義を、まことに分かりやすく、しかも目が覚めるよ
うな鮮やかさで、描き出している。上に引き写した書物の組み立て（目次）を見れば明ら
かなように、古代ギリシア文明を受け継いだイスラーム文明の発展する姿が、宗教・哲学
思想・科学技術・天文暦学・医薬・建築工芸・文芸・生活文化などにわたり広角度で能率
よく眺めわたされ、知識の尊重と宗教的寛容と異文化の受容融合という特徴点が特に注目
される。そして、このようなイスラーム文明こそ西洋近代の淵源であり、したがって私た
ちの現代文明もその基礎を探ればイスラーム文明に行きつくのだという、本書の中心テー
マがまるで扇を開くような見事さで展開されるのだ。

著者は、本書刊行に先立ちその予告として、昨（2020）年8月信州イスラーム世界勉強
会のネット上の「e定例会」に「イスラーム文明とは何か」を寄稿されていたので、本番
の書物が世に出るのを待っていた方には、まさに朗報である。

評者の私は、この本をひもといて読み進みつつ、何とはなし、50年前に出版された書物
が脳裡に浮かんだ。それは、嶋田襄平編『イスラム帝国の遺産』、平凡社、1970だ。それ
は1970~71年に刊行された東西文明の交流[全6巻]というシリーズ（1『漢とローマ』護
雅夫編／2『ペルシアと唐』山田信夫編／3『イスラム帝国の遺産』嶋田襄平編／4『モンゴル
帝国と西洋』佐口透編／5『西欧文明と東アジア』榎一雄編／6『日本と西洋』沼田次郎編）の
一冊で、はしがき（嶋田襄平）、第1章イスラム世界の成立（嶋田襄平）、第2章ムスリム
商人の活躍（森本公誠）、第3章十字軍と東西文明の交流（前嶋信次）、第4章マムルーク
朝とインド洋・地中海貿易（森本公誠）、第5章思想と学術の交流（嶋田襄平）、第6章

イスラムの美術（深井晋司）、第7章オスマン帝国の遺産（護雅夫）、文献解題、という構成となっている。

半世紀前の『イスラム帝国の遺産』と比較してみると、このたび出版された『イスラーム文明とは何か 現代科学技術と文化の礎』は、関心対象として取り上げる時代や人物や事柄はかなり重なりあっているとしても、取り上げ方はもちろん、関心の持ち方自体が、はっきり異なっているということに気付くのだ。大きな違いは、「遺産」が歴史的に完結したものの受け継ぎという切れ目を意識する見方であるのに対して、「礎」とか「源流」という見方は過去を現在に引き付け結びつける連続性を重視する見方である。また、東西文明の「交流」は対置される二者が交わり合う関係を見ることで、分離が前提となっているのに対して、「西洋の発展=脱イスラーム文明、ヨーロッパの〈一体感〉確立」を問う問題意識は、本来ヨーロッパがイスラーム文明と一体的な切っても切り離せない存在だった結合が前提とされていて、そこから分断や支配や覇権が起きて来るという見方である。

これらの相違は、半世紀のあいだの日本におけるイスラーム文明研究の進展を映し出すものだ。私は、半世紀前『イスラム帝国の遺産』が出来上がる過程を脇で観ていて、よく知っていた。同じ時期、私は東京外大のアジア・アフリカ言語文化研究所でイスラーム研究諸分野の研究者の全国的規模での共同研究プロジェクト「イスラム化と近代化」の部内責任者として、その運営小委員会（前嶋信次・嶋田襄平・私）の相談に常時当たっていたから。私は「イスラーム化」に関してイスラームの「近代性」とか7世紀からの世界史的「近代」などの着想を懐き始めていたので、東西文明交流史の約束事に疑問符を付けていた。大学での講義でも、私は、ダンテの『神曲』が預言者ムハンマドの「夜の旅」の説話の翻案なのにムハンマドを地獄に墮としている問題や、欧米の軍隊式敬礼（フランス語で「サラマレク」、日本でも自衛隊・警察・消防・鉄道・警備会社などで慣行）はムスリムの挨拶の動作に憧れたの真似が起源であること、などを導入に、ヨーロッパの成立と発展がイスラーム文明のネットワークキングのもとで展開したことを説明し、欧米中心の世界史観への批判をそれ以来しつこく続けてきた。欧米中心主義のアタマの切換えを訴える私の問題提起はカマキリの斧に過ぎなかったというのが、卒寿の私の反省だが、それでも世界の現実が世間の思考法を変えさせ、私の考えに賛同してくれる人も現れる昨今である。ところが、イスラーム研究者の中では、驚くべきことに、自分の専門領域をイスラーム「中世」史と名乗ったり、20世紀ヨーロッパの強国が組み立てた中東諸国の枠組に従って国別の専門家が活躍したり、という欧米中心主義しがみつき逆行現象も生じている。

それだから、塩尻和子さんの新著は、1970年から50年／1945年から75年／のイスラーム文明研究の歩みが生み出してきたパラダイム・チェンジ（考え方の基本の転換）すなわち末期的な欧米中心主義を脱却する方向づけを明解に顕示する仕事であって、評者の私としては「バンザイ」を叫びたいような作品の登場である。これが、社会の一般読者に向けて書かれたことの意義は、ことさら大きい。読者のための配慮（43頁のミュージカル映画「炎のアンダルシア」言及／85頁の「コーヒールンバ」歌詞／91頁オリーブ石鯨の写真／133頁のウンベルト・エーコ『薔薇の名前』と『千夜一夜』の「イウナン王の大

臣と医師ルイアンの物語」との関係指摘／など）は注目される。半世紀前の類似の書物とは異なる事例や解釈がいろいろ見られる点では、単に研究の進展というだけでなく、社会史への新しい視座の効果もある（第6章「エレガンスと生活文化」のスパイスや歌手・詩人の伊達男ズィルヤーブや服飾への視点など）。音楽は47-48頁・77-78頁・87頁で触れられているが、哲学や数学とも関係する音楽理論も含め独立の節が欲しかった。ジェンダーの問題・女性の地位については、独立の章があってもよかった。ついでに慾を言えば、法的思考が顕著なイスラームの政治思想・制度・統治技術・公共性と衡平の問題について、重版の際に加筆されることを希望したい。

本書の読者には、本書を十分に読み込んだうえで、

- ① 欧米的〈近代〉が何故、またどのようにして、逸脱・脱線・彷徨・迷走・自家撞着・矛盾・破滅の危機を引き起こすことになったのか、
 - ② それから脱出しようとする、いわゆる「ポストモダン」の立場が、イスラーム的思考の二番煎じ／ないし意識的または無意識的な盗用・剽窃／となるのは何故か、
 - ③ 世界中いたる処で、ムスリムが差別・非難・攻撃・難民化・民族浄化・ジェノサイドの対象とされているのは何故だろうか、
 - ④ 中国やインドの／あるいはどの地域にせよ先住民または少数民族集団の／伝統的思想に自爆や自滅ではない、これからの世界への打開路を拓く可能性が見出せるとすれば、それらを複合的に繋ぐネットワークは、どのようにしたら創り出せるか、
- を考えめぐらしてみても、いかがか。アタマの体操として、面白い実験ができるだろう。

以上